

[課程－ 2]

審査の結果の要旨

氏名 野沢 恭介

本研究は、深刻な公衆衛生問題の一つである自殺への予防対策としてのゲートキーパー研修 (gatekeeper training [GKT]) プログラムを、学生に向けたオンラインで利用可能なものとして新たに作成した。さらに、日本の 18 歳から 29 歳までの専門学校、短期大学、大学、大学院、高等専門学校の学生に対して、このプログラムの効果を検証するため無作為化比較試験を実施したものである。

困難を経験する学生にとって、リスクのある人を発見し紹介できるゲートキーパーなど、周囲の人によるサポートは不可欠である。ゲートキーパーとは、自殺の兆候に気づき、適切な行動 (困っている人に気づき、声をかけ、話をよく聞き、支援のためのリソースに困っている人を紹介し、見守る) をとることができる人のことである。ゲートキーパー研修は、ゲートキーパー育成のため、専門家ではない人が自殺行動のリスクのある人を特定し対応できるようにすることを目的としたプログラムであり、自殺予防における最も一般的な介入である。しかし、日本には学生向けのオンラインによるゲートキーパー研修プログラムは存在せず、学生向けのオンラインによるゲートキーパー研修プログラムの有効性を検証する無作為化比較試験も実施されていない。そこで、本研究では、学生向けオンラインピア GKT プログラムを作成し、プログラムの有効性を、ゲートキーパーとしての自己効力感を自殺者数の代替指標として無作為化比較試験により検証した。

研究デザインは、並行群間無作為化比較試験とし、介入群 (学生向けオンラインピア GKT プログラムを実施) と対照群 (調査のみ実施) を無作為に 1 : 1 に割り付けた。介入プログラムには、参加者がプログラムを受講するためのプラットフォーム、YouTube による GKT プログラムの動画 (計 6 セクション)、コメント欄 (オンライン掲示板)、テキストダウンロードのページが含まれていた。介入群の参加者は、10 日以内にプログラムを受講した。サンプルサイズは、先行研究やパイロット研究に基づき、効果量を 0.5 と想定し、脱落率を約 60% と予想し、320 人 (各群 160 人) とした。主要評価項目は、ベースライン (t_0)、介入後 (t_1 : t_0 より約 10 日後)、 t_1 から約 2 ヶ月後 (t_2) において、Gatekeeper Self-Efficacy Scale (GKSES) を用いてゲートキーパーとしての自己効力感が測定された。統計解析は、介入群と対照群の主要評価項目 (t_0 調査と t_1 調査の GKSES 総スコアの差) に関し、intention to treat (ITT) の原則により t 検定を実施した。副次評価項目も同様に検証された。また、インターネットへ依存の高・低群、COVID-19 への恐怖の高・低群間においてサブグループ解析を実施した。

本研究には、321 名の学生が参加した。主要評価項目において、介入群は対照群と比較

し、ベースラインから t_1 および t_2 調査のフォローアップまで、GKSES に有意な好ましい介入効果を示した ($t_1-t_0: t = 13.07, p < 0.01, t_2-t_0: t = 7.58, p < 0.01$)。副次評価項目では、対照群と比較して、介入群は自殺に関する知識 (Literacy of Suicide Scale [LOSS])、首尾一貫感覚 (Sense of Coherence [SOC])、精神疾患への理解 (Mental Illness and Disorder Understanding Scale [MIDUS]) における "Treatability of illness", "Efficacy of medication" および総得点で、ベースラインから t_1 と t_2 までの有意な好ましい介入効果を得た。サブグループ解析の結果は、主要評価項目で全体の結果と同様であった。ただ、COVID-19 に対する恐怖が高い群でのみ、ベースラインから t_2 調査までのレジリエンスに有意な介入効果が見られた。

本研究は、学生を対象にした、対面セッションのないオンライン GKT プログラムの、ゲートキーパーとしての自己効力に対する有効性を検証した初めての無作為化比較試験である。その結果、学生向けオンラインピア GKT プログラムにより、ゲートキーパーとしての自己効力感が、大きな効果量を持って有意に向上することが示され、本研究の仮説を支持するものとなった。この結果は、本プログラムが学生の理解しやすい学生に特化した内容が多いことなどが要因であると考えられる。今後の研究では、プログラムやプロセスを修正することで、さらに効果を向上させる方法を追求することが可能である。また、今後、より多くの学生に本プログラムを普及させるための方法をさらに追究していくことが期待される。本研究は、今後のゲートキーパー研修の発展や普及に重要な貢献をなすと考えられる。

よって本論文は博士 (保健学) の学位請求論文として合格と認められる。